

藤が丘病院屋上から富士山を望む

『寅の新年をむかえました』
昭和大学藤が丘病院 院長 真田 裕

『新年のご挨拶』
昭和大学藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院
看護部長 石橋 悦子

『就任および新年のご挨拶』
昭和大学藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院
事務長 阿久津 直利

『就任のご挨拶』
昭和大学藤が丘病院 消化器内科
教授 高橋 寛

『就任のご挨拶』
昭和大学藤が丘病院 脳神経外科
准教授 泉山 仁

巻頭言：『寅の新年を迎えました』

昭和大学藤が丘病院 院長 真田 裕



寅の新年 明けましておめでとうございます。昭和大学藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院は年来の組織構造改革に本年も引き続き取り組んでまいります。

昨年はリハビリテーション病院院長嶽山先生のもとに外科系診療責任者 筒井先生、内科系診療責任者橋本先生が夫々就任され、リハビリテーション医学講座水間教授と鼎の如く病院を支える体制が整えられました。9月には眼科が藤が丘病院からリハビリテーション病院に移動し、専用の手術室を持ってより多くの手術が出来るようになりました。一方、リハビリ病院で行われていた整形

外科手術を藤が丘病院に移し、麻酔科の負担を軽減することが出来ました。このような努力によってリハビリテーション病院の業績は格段に向上しました。組織改変による混乱を乗り越えて活躍された担当部署の皆様にご感謝申し上げます。有難うございました。

本年の第一の目標は看護基準の見直しです。昨年4月から総合相談センターを中心に看護部、医事課、主治医の皆さまの熱意によって長期入院患者さんの多くを地域医療機関と連携して見ていただいています。これによって空いた病床は急性期疾患患者さんに利用していただけます。‘病々・病診連携を推進し急性期医療に対応する’という病院の基本方針に沿った改革は着実に進んでいます。看護基準の見直しは、重症で看護度の高い患者さんを受け入れる急性期病院の機能として整備すべき必須条件です。第二の目標は臓器別センター病棟への再編成です。患者さんに判りやすい診療体制にする、内科・外科の連携をより強固にする、マンパワーを集約する、各診療科固有の診療統計を内科外科で纏め 診療実績を病院として把握する、などなど、多くの目標がこの再編にかかっています。各診療科が独立独歩で診療に当たってきた三十数年来の慣習を変えるには、発生する問題をその都度丁寧に解決していく態度が必要でしょう。循環器、呼吸器、消化器、脳神経、小児と出来る

ところからスタートいたします。
「トラを画きて狗に類す」とならないように、しっかり見極めて前進したいと存じます。皆さま本年も宜しく願います。

新年のご挨拶

藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 看護部長 石橋悦子



新年あけましておめでとうございます。
皆様はどのようにお正月過ぎを過ごされましたでしょうか。

昨年は、国は政権交代、藤が丘病院とリハビリテーション病院においては組織統合の年であり、また変革の年でもありました。その大きな課題達成に向けて真田、嶽山、両病院長を中心に邁進し、看護部としては患者さんに「安全で安心な医療・看護」を受けていただくために、両院の共通した看護システムや看護手順の整備に力を入れた年でもありました。当院では、病棟や外来の患者さんに対する指導はもとより看護師達への看護ケアのサポートを担う役割として認定看護師を現場に配置しています。この資格は、近年の医療や看護の高度化によってより専門的で水準の高い知識や技術を持った看護のスペシャリストが必要とされ始めた事を受けて日本看護協会が1996年に設立した資格制度です。認定看護師数日本一を誇る昭和大学として藤が丘病院では昨年9分野12名となりました。今年度は更に3名の増員が見込まれ患者さんへの看護の質向上に向けて喜ばしい年になりそうです。

昨年末、藤が丘病院は7:1看護配置基準取得の方針が示されました。「地域に貢献する大学病院」、「選ばれる病院」として今年益々「チーム医療」が求められる年といえます。最大の成果が出せるよう「職種間の垣根のないチーム医療」で職員一人ひとりが一致団結して取り組んで行かなければならないと考えています。今年もどうぞ宜しくお願いします。

就任および新年のご挨拶

藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 事務長 阿久津 直利

新年明けましておめでとうございます。昨年7月1日付けで昭和50年7月16日に藤が丘病院が開院してから第10代目の事務長として、また平成2年6月1日に藤が丘リハビリテーション病院が開院してから第7代目の事務長として、思いも掛けぬ大役を仰せつかりました。月日の経つのは早いもので右も左もわからないまま新年を迎えることとなりました。

前任は昭和大学屈指の頭脳明晰な事務長のもと、昭和大学病院の管理課長として皆様からのご支援をいただきながら、なんとか業務を遂行してまいりましたが、これからは大型タンカー藤が丘丸の舵取りのお手伝いをさせていただくこととなります。より一層の精進により、不惜身命で臨む覚悟ではありますが、なにぶん凡庸な若輩者でありますため、皆様の支えなくては操船もままなりません。何とぞご支援くださいますようお願い申し上げます。

さて、10年ほど続いたマイナスの医療経済政策がボディーブローのように病院経営を逼迫させているところに、アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界的な不況が追い打ちを掛けるかのように我々の生活にも多大なる影響及ぼしております。政権交代により一過性とも思われる医療政策のプラスへの転換に期待はしつつも楽観は出来ない日々が続いております。

医師不足や医療崩壊等がにわかに取りざたされ、医療界の現実の厳しさを国民が感心を持って見ているこの時期に、風をうまく受け止めて生き残るための正に選択の時であります。考えようによっては、一層の飛躍を成すための始めの一步の時でもあるわけです。

昨年は藤が丘病院と藤が丘リハビリテーション病院の組織統合をスタートさせた年でありました。眼科の移転を始めとし、各種委員会の統合や、相互の病院長による院内巡視の実施、統計資料の統合や合算化など出来るところから着実に実行してまいりました。

本年は昨年にも増して重要な年となります。藤が丘病院では診療科のセンター化に伴う病棟再編成、入院基本料7:1の看護配置基準取得、臨床検査室の移転、研究棟のあり方、点滴センターの拡充、職員ロッカーの場所確保など、藤が丘リハビリテーション病院では病床稼働率の更なる向上や医療単価の引き上げ、回復期リハビリテーションのあり方、入院・外来のリハビリテーションのあり方等々、解決せねばならない案件が山と積まれております。サッカーに例えますと『シュートを打たねば点は入らない』の通り対策を講じ実行しなければ事はなし得ないのであります。これらを両院の病院長はもとより病院職員の皆様とともに一致団結して的確なパスを回しつつ正確なシュートを放って確実に得点に結びつけたいと思います。

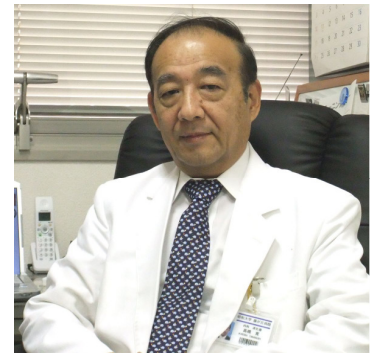
昭和大学の目標は良い医療人の育成にあります。その附属病院である当院も同じ目標に向かっておりますが、より身近な目標は「患者さんの病気を治す」ことでもあります。病気を治すには直接的であれ間接的であれ、全ての病院職員が一人一人の患者さんと何らかの携わりをもっております。何よりこの携わり方によって「この病院があっただけよかった」と思っていたらいい病院をつくるのが重要だと思っております。そして昭和大学の建学の精神である「至誠一貫」のもと全職員が仕事に誇りを持ち続け、患者さんに優しい病院として、日本中で一番たくさんの「ありがとう」を集めて参りたいと思います。これからもどうぞよろしく願います。



就任のご挨拶

藤が丘病院消化器内科 教授 高橋 寛

この度、消化器内科医長に就任いたしました高橋です。私は昭和53年に昭和大学を卒業と同時に、内科レジデントとして藤が丘病院に勤務してまいりました。昭和55年に消化器内科に入局し、平成13年まで消化器内視鏡（特に微小胃癌の診断や内視鏡治療）を中心とした診療・研究をしてまいりました。平成13年4月よりは癌研究会附属病院（現・癌研究会有明病院）の健診センターに勤務しておりました。癌研では「健診センターは、癌の早期発見に際立った健診プログラムにより、癌から身を守る」をmissionにかかげ、ヘリカルCTによる肺癌検診、高精細内視鏡やNBI（Narrow Band Imaging）による早期食道癌・胃癌の発見、Sigmoid scope やp53抗体を用いた大腸癌スクリーニング、ヒトパピローマウイルス抗体の子宮癌検診への導入、PET検診や乳癌検診の充実など癌専門病院における癌検診として先進的なプログラムを遂行してまいりました。



現在、藤が丘病院では関連した診療科を統合したセンター化構想が進んでおります。消化器センターにおいては、その機能を十分に発揮できる環境整備を整えることが急務と考えます。従来の消化器センターにはない、外科と内科が密接に結合したセンターをつくるためには、これまでの内科・外科の枠にとらわれず、それぞれの専門医が中心となり教育・診療を行うのが適切であると考えています。

内科系としては、これまで培った内視鏡技術を生かした消化器疾患の早期発見と治療を中心とした診療体制の充実と専門医の育成を早急な課題として取り組みたいと考えております。難治癌に対しては、ひとつの医療チームのなかで各専門医が相互に緊密な連携を取りながら各々の役割を果たす「癌治療における集学的治療システム」を構築が理想的であると考えます。

医療チーム内での切磋琢磨によって、幅広い知識を持ちリーダーシップを発揮する消化器医を育成することを目標にしております。皆様のご理解、ご協力をお願い致します。

就任のご挨拶

藤が丘病院脳神経外科 准教授（医長） 泉山 仁



このたび、昭和大学藤が丘病院脳神経外科医長に着任致しました泉山 仁です。私は、脳神経外科医としての最後のご奉公を、この身を捧げて完遂したいと考えております。時代はポケットベルの時代から携帯電話やメールへと便利なITツールの時代に変化しましたが、私たち脳神経外科医の忙しい生活に変化はなく、ほんの少し便利にはなりましたが、豊富な情報と仕事量に翻弄される毎日です。大病もせずにやってこれたのは、丈夫に生んで育ててくれた両親と常に支えてくれている家族のおかげだと感謝しています。近年脳神経外科学会の新入会員数が1/3にまで激減しており、近未来において脳神経外科医不足の問題は不可避であり、いかにして若い脳神経外科医を誕生させ育てていくかは、大学病院の脳神経外科にとっての重要な急務であります。まさに『人は城、人は石垣、人は掘、情けは味方・・・』であると思います。私は今までの経験を礎にして、自ら参加して昭和大学脳神経外科に将来性豊かな若者を勧誘し、優秀な脳神経外科医を育成したいと思います。

それには、藤が丘・旗の台・横浜北部の3病院が同じ方向を向き、常に良好な連携を取り、昭和大学脳神経外科全体で対応し治療をしていくことが重要です。医師を育てることが出来るのは、愛情持って教える医師であり、仕事の報酬はお金ではなく仕事です。努力は自分、評価は他人です。これからの未来と可能性に満ちた若い先生たちと、勉強し、経験し、共感していきたいと思っています。新任地におきましても微力ではございますが、藤が丘病院の発展のために、地道に一步一步努力してまいる所存でございます。何卒よろしく願い申し上げます。

安全週間ポスター優秀作品

「医療安全推進週間」の11月22日～28日の間ポスターが院内に掲示されました。投票によって、優秀作品が選ばれました。
優秀作品は小児科チームが選ばれました。



小児科チーム作成ポスター



医学教育等関係業務功労が表彰される

医学または歯学に関する教育、研究もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった方々を候補者の中から文部科学大臣が決定する、医学教育等関係業務功労者として、内科外来の看護助手谷令子さんが受賞されました。
谷さんは藤が丘病院に26年間勤務され、笑顔と一生懸命をモットーに頑張ってきたとのこと。

院内のいろいろなクリスマスイベントのご紹介



藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院においてクリスマスコンサートが開催されました。



川崎フロンターレのMF 登里亨平選手が小児病棟を訪問され、ブルーサンタさんが「フロンタくん」のぬいぐるみをプレゼントしていただきました。



小児病棟にてクリスマス会が開催されました。



藤が丘病院正面玄関にクリスマスツリーを設置